

【Tekuapa Senanukul School】

本校は 1900 年に 80-90 人の生徒を迎え、開校しました。開校当初は寺院からの支援、また地元公務員と鉱山所からの寄付金で運営されていました。近年は、1,800 名以上の生徒が通う公立校として地域社会と深い関係を築いています。生徒の家族の大半が、学校から半径 40 キロ以内の漁業、農園業、観光事業に関わっています。

本校は、7～12 学年の 6 学年制で、13 歳から 18 歳の生徒が通っています。1999 年にはミニ英語プログラム(MEP)と科学・数学プログラム(SMP)の特別クラスを設けました。MEP では、英語、数学、科学、保健の教科を全て英語で指導しています。現段階では、7～10 学年の 4 つの学年でのみ MEP が遂行されていますが、将来的には全学年へと広げていきたいと考えています。SMP では、数学と科学に重点を置き、実験や実践を通しての学びを大切にしています。卒業後、SMP で習得した知識・技術を生かして地域社会、そして国全体の発展に貢献できる人材を育てる事が目的です。

2004 年に発生したスマトラ島沖地震では、死者数、損傷、商業損害の面でタイの中で最も大きな被害を被りました。海辺から 10 キロほど内地のタクワパー郡中心部に位置する本校は、幸いなことに津波の直接被害には遭いませんでした。しかし、地域内の生徒、教員、住民が被った被害は大きなものでした。常日頃から民間、私営企業との協力体制を維持しているため、本校は津波被害者の救済策を話し合うための NGO 団体や政府官吏の集会場として活用されました。バンコクにあるチュラロンコン病院の医師達も駆けつけてくれ、津波で家族・知人を亡くした生徒たちに対しての精神的面のサポートをしていただきました。そして、本校の教員と生徒達は分区役員と共に、仮設住宅での援助に参加しました。津波発生から数日間は、電気、水、電気通信が止まっていたにも関わらず、地元メディアはパンガー県にあるカオラックなど観光地ばかりを報道し、本校が位置する海岸沿いの村々は忘れ去られていました。外部からの援助を待つだけでなく、地元地域一丸となりお互いを助け合うことの大切さを学びました。

優れた教育の場として、本校は常に新しい取り組みに力を入れています。フランス語や中国語などの外国語科目も導入しています。2010 年には、災害時に活用できる救助ロボット開発を目標とした、ロボットプロジェクトに着手しました。公立高校であるため予算はあまり多くありませんが、地元地域住民に貢献できるよう学校全体としての視野を広げていきます。